狙われた未亡人

麗しき虜囚母娘

斐芝嘉和
挿絵／木静謙二

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

第一章　遺影の前で……　4
第二章　未亡人受難　31
第三章　閉じる罠　68
第四章　淫獄の日々　96
第五章　堕ちる　128
第六章　母と娘　171
第七章　爛熟の夏　203

登場人物 *Characters*

葉山 美鈴
(はやま みすず)

夫・公康を喪ったばかりの未亡人。十六歳のとき、家庭教師だった公康と駆け落ち同然に結婚し、すぐに美雪を出産。病弱な美雪をダシに光司郎に迫られる。

葉山 美雪
(はやま みゆき)

美鈴の娘。身体が弱く病気がち。母の足枷になっている、と病弱な自分を恨んでいる。清楚な雰囲気の少女。

伊達 光司郎
(だて こうしろう)

美鈴の夫・公康の腹違いの兄にして、大資産家の伊達家当主。美雪の伯父。ブルドッグ顔の中年。

須山 祐二
(すやま ゆうじ)

美雪の体質改善を担当する鍼灸師。

「あぅ……ッ」
ぷるるん、とはみ出す柔肉の畝。
溢れた愛蜜に濡れた恥肌が冷たい空気に舐められて、秘裂や尻穴がキュッと窄む。
「私の愛人になれ、美鈴」
未亡人の繊細な割れ目にゴツゴツした指を添え、光司郎がねっとりと微笑んだ。
「お前の価値はココにしかないのだ。ココを使わなくてどうする？」
「そんな、非道い……ぁあっ」
くねる指先に花弁を弾かれ、ぬちゅぬちゅと掻き回された。
（か、感じては、ダメ……こんなこと、全然、気持ちよく、ない……）
拒む美鈴の意思を裏切り、秘裂に心地よい細波が行き渡る。
どんなに抗おうとしても、女盛りの牝の身体は肉の悦びに震えてしまう。くちゅりくちゅりと微かな音を立てて歪む粘膜花弁が、甘く痺れて熱を帯び、新たな蜜を滲ませて、トロトロに蕩けて――気がつけば、心も弛み始めていた。
義兄の言葉は間違いではない。美雪を守るためには、確かに金が要る。
自分が犠牲になることで娘を助けられるのなら――母としてそれは、正しいことなのではないか――。

（違う……違うわ、それは違う……）
否定する理性が弱い。硬い指先に淫唇をしごかれ、割れ目から溢れんばかりの痺悦が湧き上がると、ダメ、いけない、と思う気持ちが溶けていく。
「うぅ、ふぅぅ、く、うぅぅ……あっ!!　ンンッ」
膣穴にヌプッと、硬い指先。
背筋に熱いモノが走り抜け――肉穴をクポクポ鳴らされると、意思を無視して喉が反り、わななく唇から甘い吐息がこぼれそうになった。
「おや？　イヤだイヤだと言っている割に、ココはずいぶん濡れているではないか」
指先に潤みを感じた光司郎が、犬に似た卑しい顔をさらに醜く歪めた。
「夫の遺影の前で、夫の義兄に組み伏せられて、昂奮してしまったのか？」
「違う、違います……違うんですッ」
「なにが違うんだ？　ええ？　ああそうか、私の愛人になることが嬉しいのか」
「ち……ちが……ぁうっ!!」
指が引き抜かれたと思ったら、すぐに別の、熱く硬い大きな塊が秘裂にグチュッと押し当てられた。
目を向けなくても分かる。男根だ。鋼のように強張ったおぞましい肉棒が、亀頭を

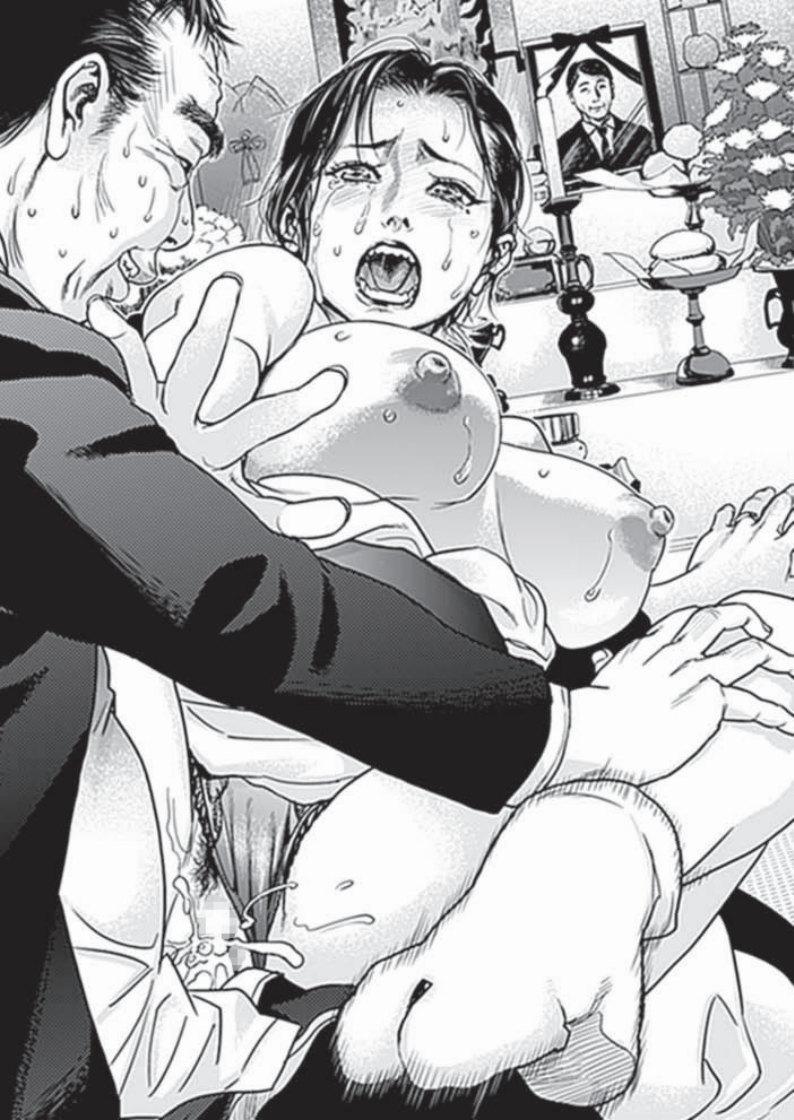
怒らせ傘を広げて、女の大切な場所に切っ先を埋めようとしている。
「待って、待って待って……愛人に、なります！」
追い詰められた美鈴は、とうとう叫んでしまった。
囲われ者になどなりたくない、しかし光司郎を止めるにはこう言うしかない。
「義兄様のおっしゃりたいことは、分かりました。た、確かに、私ひとりでは美雪を養えません。でも……せめて四十九日が済むまで待ってください。こんなときに、こんな場所で、こんなことをしたのでは……公康さんに申し訳なくて……」
重い胸を細腕で押し、懸命に頼む。いくら獣のような義兄だとて、少しくらいは人間らしい感情を持っているはず。死者を悼む気持ちを汲んでくれるのではないか、私の心が落ち着いて自然になびくのを、待ってくれるのではないか――しかし。
「バカを言え。亡夫を想って涙をこぼすからこそ未亡人は美味いのだ。お前の身体が公康を忘れないうちに、私の味を教え込んでやる」
目をギラつかせた光司郎が、圧力を強めてきた。
「ま、待って……ああダメ、き、公康さんが見ています……あ、あ……あぁあっ」
爽やかに微笑む遺影の前で、夫のモノしか知らない肉穴に、太くて硬いモノが押し入ってくる。ゴツゴツした形、火傷しそうな熱、どっしりとした存在感――。

（ああそんな、き、公康さんのモノと、ちが、う……）
慣れた場所とは違う粘膜をしごかれ、予期せぬ場所に甘い痺れを刻み込まれた。
夫でない男に犯されているのだという、苦い実感。たくましい淫棒をグリ、グリ、とねじ込まれるたび操が穢され、奪われ、貶められていく。
一方、イヤイヤと首を振る未亡人にのしかかった光司郎は、
「おおぅ、これは素晴らしい。ヌメヌメした粘膜が、亀頭に絡みついてくる。子供をひとり産んでおるのに、締めつけも悪く、ない……」
小刻みに腰を振って美鈴の熱い肉穴を抉りつつ、嬉しそうに頬を弛めた。
「んん？　なんだ、もう感じているのか？」
「ち、違います……うぅ……」
「なにが違う？　まだすべてねじ込んでいないのに、お前のココは波打っているではないか。おお、おお……細かなヒダヒダが吸いついてきた。思った以上に具合がイイ。なるほど、あの公康が夢中になるわけだな。これだけいやらしいオマ〇コならば、どんな朴念仁でも一回まぐわっただけで獣に変わる」
卑猥な言葉をかけられているうちに、青筋を立てた淫茎が、根元までしっかりとねじ込まれてしまった。肉畝や下腹にチクチクと、硬い陰毛が刺さってくる。

（犯された……義兄様の太いのが、私の奥に……ああ、こんなに深く、まで……）
腹の中に図々しく居座った、たくましい剛直の感触。
公康のモノより短いが、傘は大きく肉茎も太い。捻れ方も異なっていて、覆い被さった光司郎がゆっくり腰を退き、再び押し込んでくると、夫にされたときとは違う場所が強くしごかれ、違和感のある肉悦がじわりじわりと湧いた。
「ふぅ……あ、ンぅぅ……」
男の腰の動きに合わせて、鼻にかかった甘え声が漏れる。感じているつもりはないし、感じてはいけないと思っているのに――ズズン、と突き込まれるたび熱いモノが子宮に膨れ、息が乱れた。ぬぽちゅちゅちゅ、と膣穴が捲れ返れば、痺れるような旋律が腰全体に響き、ハの字に伸びた脚の先、白い足袋を履いた爪先が、なにかを掴むようにキュウッと曲がる。
三十二、三は女の盛り。成熟した身体は牡を求めて常に秘かに飢えていて、肉の悦びを与えられれば素直な反応を示してしまう。光司郎の胸を突き上げているつもりの腕がいつしか猪首にしがみつき、黒い礼服をギュウッと掴んでいた。恥辱に歪んでいた眉根が開き、紅く染まった額に浮くのは真珠のような汗の粒。
息が上擦り、乱れ、艶めかしく裏返った。涙に潤んだ瞳が淫熱に浮かされてふらふ

らと揺れ、次第に虚ろになっていく。
（赦して……赦して、公康さん……弱い私を、どうか、赦して……）
両手で顔を覆い、悦びの混じった涙声で啜り泣いていると、
「どれ、胸はどうだ？」
犬のように腰を振り続けている光司郎が身を起こし、肌襦袢に手を伸ばしてきた。
「うぅ……ぁあっ」
声を上げる間もなく捲られ、ぷるるん、と震えてこぼれ出る乳房。柔らかな肌着に擦れていた乳首は野苺のように紅く、春先の木の芽のように硬く痼り勃っている。
「ほほう。これはまた、美しい乳房だ。とても一児の母とは思えぬな」
いやらしい笑みを深めた光司郎が、弾む双球に両手を伸ばした。
――むぎゅ。
しっとり汗ばんだ瑞々しい乳肌に、武骨な指先が喰い込む。震えながら勃起していた乳首は分厚い掌に圧し潰されて、胸の先にコリコリした硬さが喰い込んできた。
「佳い感触だ。指が押し返される。公康にもこうして揉まれていたのか？　んん？」
「さ、されていません……公康さんは、そんな、こと……しません」
掠れた声で反論している間も、美鈴の乳房は容赦なく揉み回されていた。歪んだ双

球が寄せ合わされ、汗に濡れた乳谷が摺り合わされる。
（な……なに、これ……ああ、胸が……）
光司郎に言った言葉は半分本当で、半分は嘘だ。公康も、美鈴の乳房を愛していた。胸の谷間に顔を埋めたり、赤ん坊のように吸いついたり、舐め回したり――しかし、これほど荒々しく揉みまくられたのは初めてだ。
十本の指に蹂躙された乳肉が、甘く熱く蕩けていく。硬い指先が深々と沈み込んだ瞬間は痛いのに、圧力が退いて柔らかな丸みが元に戻ると、乳奥に産みつけられた痛みが鈍い快感に代わり、そのうちに、新たな悦びを求めてはしたなく疼き始める。
「公康もバカだな。これほどの乳は滅多にないのに」
瑞々しい弾力を存分に愉しんだ光司郎が、乳房から手を離し、再び鑑賞し始めた。
「だめ、やめて……見ないで、ください……」
乱れた呼吸に合わせて緩やかにうねる双球に、ねっとりとした視線を感じる。ただでさえたわわに実っていた乳果が、力強い愛撫によって内側から火照り、普段より一回り以上大きくなって、繊細な乳肌がピンピンに張り詰めているのだ。男の掌にしごかれていた乳首は痛いほど痼り、紅さを増した乳暈がプクッと浮き上がっている。光司郎が肉穴の奥をズン、ズン、と突けば、丸く盛り上がった乳房が波打ちながら大き



く揺れて、真っ赤な乳首が踊りまくる。
「こんな上玉が孤閨を憂いつつ歳を経ていくなど、もったいない。亡き公康の分まで、私がしゃぶり尽くしてやる」
黄ばんだ歯を剥き出して獣の笑みを浮かべた光司郎が、ハの字に開いた美鈴のムチムチとした太腿に手を這わせた。
「う……ぁあっ!? や、やめてぇっ」
止める間もあらばこそ、膝が裏側から掴まれて、グイッと押し上げられる。
白く伸びやかな美脚が無理矢理曲げられ、左右に開かれて、仰向けに大きなM字を描いた。腰の角度が変わり、力強く打ち込まれている男根にいままでとは違う場所をぐちゅりぐちゅりと抉られる。
「やめて、お願い……公康さんが……ぁあ、ぁああっ」
光司郎が身体を起こしたことで、無理矢理犯された秘裂に幻の視線を感じた。遺影の中で微笑んでいる夫に、ジッと見つめられているような気がする。
「いいではないか。公康にもしっかり見てもらおう」
笑みを深めた光司郎が、腰の動きに変化を加えた。ただ突くだけでなく大きく回し、浅く三回、深く四回——次第にリズムを速め、はだけた胸元でしっとり輝いている美

乳を激しく弾ませる。
光司郎の太腿に打たれた尻が、パンパンパンと小気味よく鳴った。出入りする剛直に膣穴が捲れ、細かく泡立った愛液とともに湿った音をこぼす。
「安心しろ、公康。お前が遺した妻は俺がありがたくいただいた。もしそこにいるのなら、よぅく見ろ。好きなだけ見ろ。お前の美鈴はいま、俺のモノをこんなに深々と咥え込んで、嬉しそうに咽び泣いているぞ！」
「ああっ、やめて、イヤ……イヤァッ!!」
愛する夫の気配をすぐ傍に感じ、美鈴は両手で顔を覆った。
見られている――哀しんでいる。
『美鈴……お前は義兄さんのモノでも、そんなに感じてしまうのか』
辛そうな顔で静かに詰る夫の声を、耳の奥に聞いた。
（違う、違うの……感じたくなんてないの！　でも、でも……ぁああっ！）
光司郎がさらに荒ぶり、肉芯を激しく突きまくられる。
揺さぶられた子宮が煮える。
恥辱に震える心が沸き立つ淫悦に蝕まれ、拒む気持ちが蕩けていく。
（ダメ、いや……こんな……公康さんの前で、公康さんに見られているのに……か、

感じて……しま、うぅぅぅ）

牝に堕ちていく予感がした。夫の記憶が薄れ、朧になっていく。羞じらいを忘れて声を上げ、結い髪が崩れるほど悦び乱れる自分を想像し――しかし。

「く……うぅっ!!」

いきなり光司郎が低く呻き、ビクンッと硬直した。

深々と打ち込まれた男根が小刻みに震え、太さ、硬さ、熱さを増して、

「あ、あ……あああ……」

びゅくり、びゅくり、と膣奥に放たれる、熱い溶岩。

美鈴がイきぎる前に、光司郎が果ててしまったのだ。あれほどたくましかった男根が急に力を失い、間歇的に精液を噴きながらどんどん小さくなっていく。

「いかん、あまりにも気持ちイイ穴だから我慢できなかったぞ」

苦笑した光司郎がゆっくりと腰を退き――ぬちゅり、と卑猥な音を立てて、男根が引き抜かれた。あられもなく捲れ返っていた膣穴が喘ぎながら窄みつつ、いやらしくぬめり光る白濁液をこぼす。溢れた精液は会陰部を伝って尻穴を濡らし、桜色に染まった桃尻からしどけなく乱れた湯文字へ、とろりとろりと垂れ落ちた。

第二章　未亡人受難

公康の葬儀が終わってから、アッという間に二週間が経った。光司郎から借り受けた離れ家での暮らしにも、だんだん慣れてきたころ――。

「そういえば……最近調子がよいみたいね、美雪さん」

ふたりきりの食卓で、美鈴がふと訊ねると、向かいの席に腰掛けた美雪がはにかんだ笑みを浮かべてコクンと頷いた。セーラー服の肩に艶やかな黒髪が揺れる。

「須山先生の鍼のおかげです。朝食もこうして、残さずに食べられるようになりました。寝起きもとってもよいのですよ」

あどけない頬にウソはない。いつも蒼褪めていた肌は血色がよく、心なしか、声にも張りがあるようだ。

「須山先生は本当によい先生ですね、お母様。光司郎伯父様にお礼を言わなくては」

「え、ええ……そうね。いいわ、私から伯父様に伝えておきます」

曇りそうになった顔を懸命に微笑ませて、美鈴はどうにか相槌を打った。

須山先生というのは光司郎が紹介してくれた小太りの鍼灸師だが、同時に美鈴を犯

す男でもある。娘の治療代を身体で払え、というわけだ。
（あんな穢らわしい男に、美雪の身体を弄らせるだなんて……）
歯噛みしたい気分だが、どういうわけか光司郎も須山も娘の前では紳士だった。美雪の目に映る光司郎は優しい伯父でしかなく、須山も腕のいい鍼灸師だ。ふたりを悪く言っても理解してもらえないだろうし――それにあの、思い出すのも忌まわしい淫らな行為は、ひとり娘には絶対に知られたくない。
恥ずかしさもあるが、それ以上に、美雪を傷つけたくない。公康に似て心優しいひとり娘は、自分のために母が犠牲になっていると知れば深く哀しむだろう。
話を切り替えるため、美鈴は壁掛け時計に目をやった。
「ところで美雪さん、お時間は大丈夫なの？」
「ああ、いけない！　急がなければ」
慌てた美雪は味噌汁を掻き込み、椅子を鳴らして席を立つ。日に日に大人びてきてはいるが、こういうところはまだ子供だ。
「この間、遅刻しそうになったとき、とっても怖かったのですよ。黒山（くろやま）さんったら、赤信号を全部無視するんですもの。おかげで遅刻はしなかったけれど、あんな思いをするのはもう懲り懲り。行ってきます！」

「あ、駆けてはダメですよ！　あなたはすぐ息が上がってしまうのですから……」
「平気です、調子がよいと言ったでしょう？」
玄関まで見送りに出た美鈴に爽やかな笑顔を残し、美雪は紺色のスカートを翻して駆けていった。その行く手、砂利を敷き詰めた車回しにはすでに黒塗りの高級車が停められていて、運転手の黒山が扉を開けて待っている。
黒服に蝶ネクタイを締めた初老の運転手は、美鈴に気づいて深々と頭を下げた。慌てて返礼しているうちに美雪が後部座席へ乗り込み、閉じられた扉の窓越しに小さな手を振ってくる。
「行ってらっしゃい！」
腕を大きく振り返した美鈴の頬に、自然な笑みが浮かんだ。自分のことはともかくとして、美雪にはいまの生活が最良のようだ。
（分かってください、公康さん……あの娘のためなんです。ほら、いつも辛そうにしていた美雪が、あんなにはしゃいでいますよ……）
ひとり娘のためならば、私はどんな恥辱にも耐えてみせる――美雪を乗せた車が門外に消えると同時に、美鈴は唇を噛んだ。頭上には五月晴れの青空が広がっているが、未亡人の胸中には鉛色の苦い雲が立ち込める。

左手首の時計に視線を落とすと、七時半を回ったところ。仕事前にやってくる光司郎を出迎えるために、早く着替えなければならない。

「仕方ない、ことなのよ……」

辛そうに歪んだ顔を俯け、小さく独りごちた美鈴は、爽やかな五月の風に背を向けてうしろ手に扉を閉めた。

＊　＊　＊

「ほう？　今日の喪服は可愛いな」

いつもの通り、八時きっかりにやってきた光司郎は、上がり框に三つ指をついて出迎えた美鈴を見下ろし、ぞんざいな口調で褒めた。単なる世辞だということは、美鈴の返事を待たずにドカドカと上がり込んだことから明白だ。

今日選んだのは、マーメイドタイプのワンピースにボレロを合わせた洋装の喪服。細い紐で前を閉じれば、胸の膨らみを守る形になる。背開きのワンピースは未亡人のほどよく引き締まったボディラインにぴったりと寄り添い、裾先を飾る金魚のひれのようなフリルが女性らしさを強調している。

いやらしい義兄に媚びるための服ではない。むしろその逆、身体を這い回る不躾な手を拒むためだ。余裕の少ないこのワンピースなら簡単に捲られはしない。サラサラ

としたスカートの下には黒いストッキングを穿いているし――そもそも、四十九日まではという名目で喪服に着替えているのは、男たちに心まで許したのではないというせめてもの意思表示だ。

虚しい抵抗だということは承知している。光司郎や須山がその気になれば、こんな服など簡単に引き裂かれてしまうだろう。

だが、それでも――。

（美雪のためにしていることです。あなたたちに屈したのではありません！）

そう思い続けるためにはどうしても、喪服に着替える必要があった。

たいして背の違わない義兄を追い、手前の六畳間へ入る。季節外れの白菊で飾られた中陰壇に公康の遺影が微笑んでいる、弔事用の部屋だ。亡夫の視線を感じるこの部屋で男たちに蹂躙されるのはイヤなのだが、光司郎も須山も、美鈴の辛そうな顔に悦びを感じるらしい。

「今日は忙しいのでな。お前を弄ってやれぬ」

窓を背にして振り返った光司郎が、弛んだ頬を歪めていやらしい笑みを浮かべた。弄らない、というのなら悦ぶべきなのだろうが、喪服の胸や腰にはねっとりとした視線が這い回り、少しも油断できない。

「そろそろ私の珍棒にも慣れただろう？　今日は口でしてもらおうか」
「え……く、口……!?」
息を呑む美鈴にニヤニヤと笑いかけつつ、光司郎はベルトを弛め、ズボンの前を開けた。トランクスのスリットに芋虫のような指を挿し込み――まだ柔らかな、それでいて不気味なほど太い淫棒を引き出す。
「フェラチオだ。知らぬのか？　愛する男のモノにキスをし、犬のように舐め上げたり赤ん坊のようにしゃぶったりする性戯だ」
「そ、そんな……！」
むくつけきペニスに、口をつける――想像しただけで吐き気がした。そういう性戯があることは知っていたが、しかし、まさか、自分がすることになろうとは。
「別に難しいことではない。公康にしてやっていたようにすればよいのだ」
「き……公康さんは、そんなおぞましいこと……」
「したことがない？　ほほう、お前の口はまだ処女なのか」
蒼褪めた美鈴を見ているだけで、光司郎は昂奮するらしい。力無く頭を垂れていた男根が太さと長さを増し、ムクムクと鎌首をもたげた。細かな皺が寄っていた亀頭も熱い血潮を溜めてみるみるうちに大きくなり――むくれた切っ先を仰向けて、木の根

のように捻れた肉茎が猛々しく反り返る。
「こんな美人を娶っておいて、ロクに躾もしていなかったのか。公康は愚かだな」
「愚かなのはあなたです！　女性をなんだと思っているのですか⁉」
「肉穴だ」
「……え？」
「聞こえなかったのか？　お前たち女は、珍棒をねじ込まれるためにある肉穴だ」
黄ばんだ歯を剥いて、光司郎が獣のように笑う。
「膣はもちろん、口も、尻の穴も――たくましい牡の黒光りする淫棒を咥え込むためにあるのだ。知らなかったのか？」
冗談を言っている顔ではない。
光司郎は本気で、そう思っているらしい。
（なんて非道いヒトなの⁉　女性を、ただの穴だなんて……！）
恥辱に歯噛みし、下劣な義兄を睨みつけていると。
「ふぅむ、舐めたくないのか。人妻遊びの愉しみは他人の仕込んだ性戯を味わえることだが、なにも仕込まれていないのではどうしようもないな」
戯けた仕草で肩を竦めた光司郎が、いきり勃つ逸物を押さえ、下着の中へ無理矢理

押し戻そうとし始めた。
（え……しない、の……？）
力ずくでさせられそうになったら必死に抵抗しよう、と秘かに身構えていた美鈴は、肩透かしを喰らって拍子抜けした。理由は分からないが、ふぇらちおとかいうおぞましい行為をしなくてよいならそれで十分だ――しかし。
光司郎のような男が、こんなにあっさり身を退くはずがなかった。
「一から仕込まねばならぬのなら、若いほうがいいな。美雪が帰ってきたら知らせろ。お前と公康の目の前で、私が女にしてやる」
「……ッ⁉　な、なにを、バカな……美雪はまだ子供ですよ⁉」
「いいや、大人だ。現にお前は、美雪と同じ歳で公康を誑し込んだではないか」
ビクッと身を竦める美鈴。それは確かにそうだが、しかし――。
「わ、私と公康さんは、愛し合っていました！　家庭教師として勉強を見ていただいただけでなく、いろんな悩みを聞いてもらったり、すぐに悲観するうしろ向きな性格を直していただいたり……」
公康との想い出は、どれもこれも温かなモノだ。光司郎が言うような、肉穴と淫棒だけの関係ではない。

「あなたと美雪の間には、愛なんてないのでしょう？　ならば……」
「ほう？　ならばどうする？　美雪を連れて出ていくか？　せっかくあんなに元気になった美雪を、再び辛い日々に引き戻すのか？」
「そ、それは……」
それはダメだ。できない。
今朝のあの、無邪気に駆けていたうしろ姿を見てしまったら、もう――いつも蒼褪め、辛そうに俯いている美雪は、二度と見たくない。
逃げ道がないことを再確認して唇を噛んだ美鈴に、
「そんな顔をするな。私は決して、美雪を必ず犯すと言ったのではないぞ」
光司郎が粘着く口調で語りかける。
「私は、お前のようによく熟れた大人の女が好きなのだ。お前がフェラチオしてくれるのなら、あんな小娘などに手を出すものか」
人差し指だけ伸ばした手で、自らの足元を指差す光司郎。
ここに跪け、ということか――無言の命令を感じ取った美鈴は、ふらり、と蹌踉(よろ)めきながら前へ出た。
（イヤ……イヤ……オチンチンを舐めるだなんて、絶対にイヤッ！）

だが、しなければならない。
美雪を守るために、しなければならない。
義兄の足元に跪くと、文字通り目と鼻の先に、真っ赤な亀頭が揺れる。鼻腔に漂い込んでねっとりと貼りつく、鰯（するめ）に似た香ばしい匂い。青筋を浮かべた淫茎やヌラヌラと光り輝く牡肉のおぞましさに、美鈴は思わず顔を背けてしまう。
「どうした？　早く舐めろ」
「あぅっ⁉　あ……ンぷっ！」
髪を掴まれ揺さぶられ、唇に熱くて硬い肉塊がグリッと擦りつけられた。
（き、汚いッ！）
亀頭に滲んだ生臭い粘液が、唇から頬へ――イヤイヤと首を振るのに、髪を掴まれているから逃れられない。藻掻けば藻掻くほど反り返った淫棒が顔の上を転がり、頬が揉まれ、鼻が圧し潰されてしまう。
「舐められないのなら舐められないとハッキリ言え。私はそれでもいいのだぞ。お前の代わりに美雪を仕込むだけだからな」
眉を歪めて啜り泣く美鈴を見下ろし、光司郎がいやらしい笑みを深めた。
「美雪であれば、まだおかしなクセはついていまい。朝から晩まで手取り足取り、私

好みのペットになるまでじっくり躾てやろう」
「ダメ、それだけは……」
「ならばさっさと舐めろ！　私は優しい男だが、忍耐にも限界はある。いつまでもワガママを言っていられると思ったら大間違いだぞ!!」
低い声で凄まれた美鈴は、涙に濡れた睫を伏せてギュッと目を瞑った。
（み、美雪の、ため……美雪のためよ）
愛する娘の笑顔を思い出し、震える唇を開く。逃げたがっている顔を懸命に捻り、頬に押しつけられている熱くて太い肉棒へ、舌を――。
「うぅっ！」
舌先がほんの少し触れた瞬間、全身の毛が逆立つほどの不快感が湧いた。背筋が震え、心臓が縮み上がる。光司郎の腰にしがみついた両手が、仕立てのよいスーツに白く細い指を喰い込ませて深い皺を刻む。
もうイヤだ、こんな穢らわしいこと、したくない――だが、しなければならない。
「最初は根元からだ。唇でペニスを挟むようにして、舌先で微妙な凹凸を確かめるように……もっと強く押しつけろ。唾液を擦り込むつもりで舐めるんだ」
静かな口調で命じた光司郎が、美鈴の髪から手を離した。逃げようと思えば逃げら

れるようになったが、美鈴は義兄の腰にしがみついたまま首を捻り、淫棒の下へ顔を滑り込ませた。額や鼻、頬に擦れる重い肉の感触を頼りに、ぴちゃ、ぺちょ、と小さな水音を立てて恐る恐る舐め続ける。

（ヘンな、味……それに、この硬さ、この熱さ……太い、大きい……信じられない、こんなモノが私の中に入ってしまうの……？）

探りながら這う舌が、熱い弾力に押し返された。眉間に皺を寄せ、硬く瞼を閉じていても、捻れた黒松の根のようなおぞましい形状はハッキリと分かる。

緩く捻れた淫茎、わずかに括れたカリ首と猛々しく張り出した肉笠——男根の裏側には糸が縒れたような筋があり、それを辿り降りていけば、胡桃大の珠をふたつ含んだ皺だらけの陰嚢がぶらさがっている。

（気持ち、悪い……男のヒトのモノを舐めるだなんて、おかしい……汚い……）

舌に染み広がる甘辛さに、美鈴は涙をこぼした。込み上げてくる嫌悪は、相手が光司郎だからではない。美鈴にとってのペニスは、悦びを与えてくれる男性器というより穢らわしい排泄器官だという印象が強い。もし公康に頼まれたのだとしても、同じように拒んだだろう——しかし。

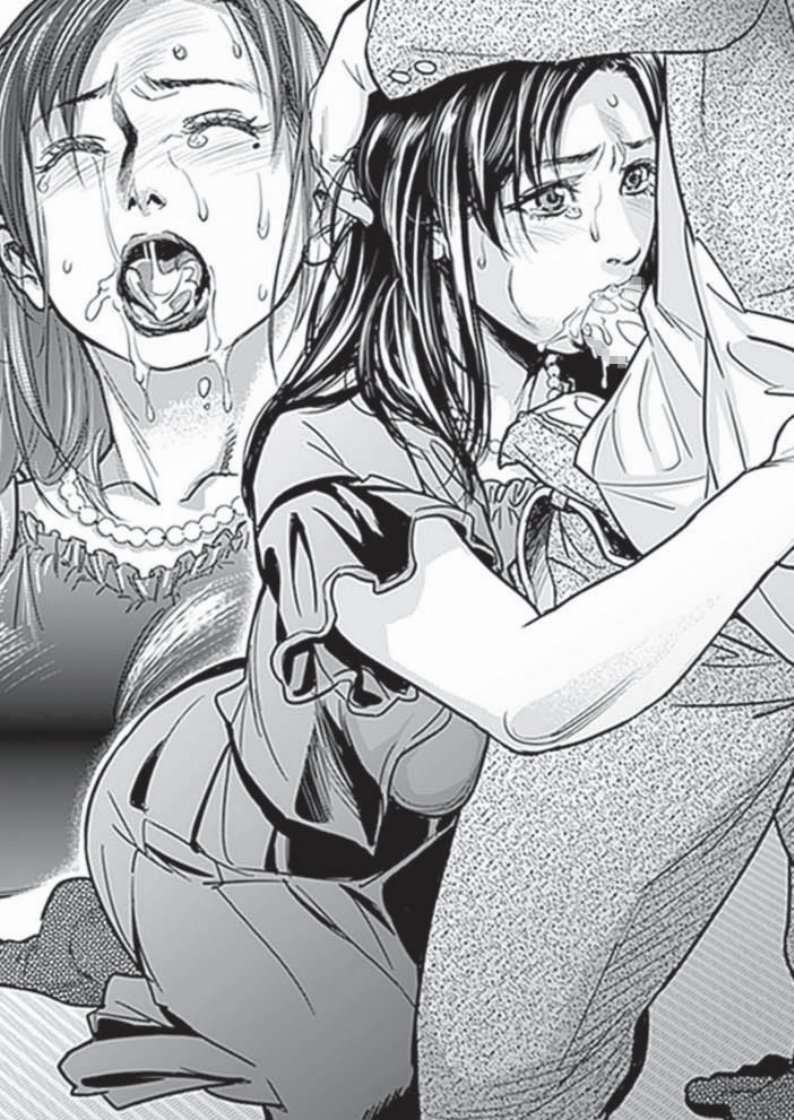
「ふぅむ。全然愉しくないな。やはり美雪を……」

不機嫌そうな光司郎の声。
慌てた美鈴は吐き気をこらえ、必死になって舐め上げた。光司郎の腰にしがみついて首を伸ばし、根元から筒先へ、顔を擦りつけるように何度も、何度も。
仁王立ちした小太りの男の足元に跪き、反り返る淫棒をピチャピチャ舐めまくる喪服姿の未亡人。すぐ傍には、爽やかに微笑んだ夫の遺影がある。短くなった線香が、香る煙を揺らしている。
（許して、許して、公康さん……美雪のためなの、仕方ないの……好きでしているのではないのよ、お願い、私を許して……！）
頬にこぼれた涙が、唾液まみれの亀頭に拭い取られた。両手は光司郎の腰を掴んでいるから、いきり勃つ男根は美鈴の仰向いた顔に擦れ、左右に跳ねる。
根元へ顔を戻せばスッと通った鼻筋に淫茎が寄り添い、熟したプラムのような亀頭が額に乗った。裏筋にまぶした涎が閉じた瞼に塗りつけられる。黒い喪服に包まれた細い背筋をくねらせ、全身を使って伸び上がるように舐め続けているうちに、蒼褪めた顔が唾液まみれのペニスに蹂躙され、上品な薄化粧が溶け崩れてしまう。
ゴツゴツした淫肉にしごかれて、舌が痺れ始めた。開きっぱなしの口の端から涎が溢れ、細い顎から氷柱のように垂れ下がる。

「なんだ、やればできるではないか」
光司郎の声色がわずかに変わり、頭に大きな手が置かれた。緩く波打つ艶やかな黒髪が、優しい手つき――いや、飼い犬を愛でるような手つきで撫でられる。
「公康に甘やかされていたせいでなにも知らないが、不器用ではないな。初めてにしては上出来だ。ただの肉穴から可愛いペットに格上げしてやる」
褒められた、のか――恐る恐る薄目を開け、上目遣いに光司郎の顔色を窺うと、ギラギラした瞳で見下ろされていた。
「ペットの仕事は、飼い主の命令に従うことだ。お前が従順であるうちは美雪には決して手を出さぬと約束しよう」
「ほ、本当ですか⁉」
「違う。そこは『ありがとうございます』だ。公康の喪に服しているのだから御主人様と呼ばなくてもいいが、光司郎様、くらいは言え」
「あ……ありがとうございます、光司郎、様……」
口にした途端、自分が本当に愛玩動物になってしまったような気がした。恥辱に心がひび割れる。喉の奥から嗚咽が迫り上がってきて、涙がポロポロこぼれてしまう。
「大きく口を開け。珍棒をねじ込んでやる」

黄ばんだ歯を剥き出しにして、光司郎が笑った。
イヤ、と叫びそうになった自分を押し殺し、美鈴はおずおずと命令に従う。
「もっと……もっと大きく。顔を仰向けて喉を伸ばせ」
低い声で命じつつ、光司郎は美鈴の頭を両手で挟むように固定。ポッカリと開いた口へ真っ赤な亀頭を向け、ゆっくり、ゆっくり、押し込んでいく。
「ぇお……ッ⁉　お、ぇ……ンぉっ！」
舌の上に感じるずっしりとした重み、上顎に擦れる熱い肉塊。
（お、お……大きいッ！　太い、硬い……き、汚いッ！）
こらえにこらえていた嫌悪感が爆発し、美鈴はパニックに陥った。白い指を握り込み、光司郎の腰を叩く。
しかし男根は容赦なく口腔を埋め尽くし、猛る肉冠が咽喉蓋に触れた。さらに圧力が加えられ、雄々しくエラを張り出した亀頭が喉奥へ――。
「ンご、ぇぶっ⁉　ン、ン、ンぅぅうっ！」
ぬぶぐっ！
たくましい牡肉に喉を抉られた。食道粘膜が嘔吐反射を起こし、伸ばした首の下で小さな喉仏が激しく上下。

「すぐに済む。我慢しろ」
悦びに顔を赤らめた光司郎が藻掻く美鈴の頭をガッチリ押さえ、自ら腰を振り始めた。
前後する淫棒に舌が蹂躙される。出入りする肉茎に唇が捲れ返り、赤ん坊の拳ほどもある亀頭に喉と口の境目がぐぽ！　ぐぽ！　ぐぽ！　と抉られる。
（やめて、イヤ……やっぱりダメぇえっ！）
幼児退行を起こすほどの、恐怖と嫌悪。
息苦しさに赤らんだ頬が涙に濡れ、男根をねじ込まれた唇は垂れる鼻水と掻き出された涎でグチョグチョになってしまう。
まともな人間のすることではない、こんなことをしてなにが面白いのか――男といえば優しい公康しか知らなかった美鈴は、恐怖という名の鑿（のみ）で心を削り取られているようなショックを受けた。
喉奥を抉られるたび、ヒトであることが否定されるような――男根を悦ばせるだけの、温かくて柔らかな肉穴になっていくような――。
未亡人が蒼褪めれば蒼褪めるほど、ブルドッグのような男は昂奮するらしい。
「なんだ、本当に初めてだったのか？　よしよし、いいぞ。膣でないのは残念だが、



この穴の処女はいただけたのだからな。どんなモノでも初モノはイイ」
黄ばんだ歯を剥いて腰を回し、ペニスを激しく前後させ、美鈴の口腔を掻き回す。
「ンぉ……ンぶ、えぐ……ンぉ」
嗚咽をこぼす口の中で、ただでさえ太かった牡肉がムクムクと膨れあがる。
(ああダメ、やめて……く、口は、やめて)
穢される予感。精液が噴き出してくる予兆。
蒼褪めた美鈴は光司郎の腰を掴み、必死に押したが、
「おお、処女らしい反応だな。いいぞ。中古品にしては上出来だ」
非力な抵抗は逆に、さらなる猛々しさを引き出してしまった。
頭がガッチリ押さえられる。鼻が痛くなるほど、男の腹がぶつかってくる。
ぐぽちゅ、ぐぽちゅ、ぐぽちゅ――口腔を埋め尽くした肉塊が荒々しく前後し、舌が磨り潰されて痺れてしまった。喉を貫く生臭い肉塊が、一突きされるたびにさらに熱く、さらに硬く怒張して――。
びゅくっ！　びゅぱぱっ！
いきなり煮え滾った溶岩が迸り、熱い塊が食道に粘着いた。
生臭い粘液の塊に塞がれる喉。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!